令和5年度　小平市立小平第七小学校　学校評価報告書

学校教育目標

本校及び地域社会の実態に基づき、「よく考える子」「いつも元気な子」「こころのやさしい子」の育成を目標に掲げ、その達成に努める。

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　子どもも大人も笑顔と思いやりがいっぱいの学校

【目指す児童・生徒像】　◎よい考えいっぱい　他者と考えを深め合える子　○あいさついっぱい　すすんで行動しようとする子　○思いやりいっぱい　相手の気持ちを考えられる子

【目指す教員像】　○児童を心から慈しみ理解し、よさや個性を引き出し、伸ばす教職員　○自らの課題を認識し、日々研鑽に努めると共に、協働して磨き合う教職員　○地域を愛し、地域や保護者と共感し、積極的に対話しながら地域や保護者や地域の信頼に応える教職員

前年度までの学校経営上の成果と課題

〈成果〉①学習者用端末を含むICT機器の活用や「学習プロセス」を生かした主体的・対話的な学びの具現化により、学力向上につながる授業改善を行うことができた。 ②校内研究の「書く力」に関する取組により、児童の書くことに対する意識を高めることができた。 ③コロナ禍においても、保護者・地域との連携を図って教育活動を進めることができた。

〈課題〉①教科担任制と校内研究の取組を通して、児童の「書く力」や学力向上を目指す。 ②体力向上への意識を高める。 ③心の教育の更なる充実を図り、SNSの問題などの未然防止につなげる。

	具体的方策	第1回評価 取組指標	第1回評価 成果指標	成果・課題・対策	第2回評価 取組指標	第2回評価 成果指標	学校関係者評価（○成果　●課題）	成果・課題・次年度以降の対策
学力向上	「計算クエスト」「東京ベーシック・ドリル」等の実施や学習者用端末等ICT機器等を活用した視覚的に分かりやすい授業を行う。	4	4	児童・保護者ともに、「学校で学習した内容を理解している」ことについて、肯定的な回答の割合は約9割であった。学習者用端末等のICT機器を活用した授業については、全ての教員が肯定的な回答をしている。「学習者用端末を使うと学習が分かりやすい」と答えた児童も9割に達している。今後も活用を広げ、児童の学習理解につなげていく。	4	4	○学校公開では、児童の落ち着きや、先生方の授業の工夫が感じられた。 ○授業では、児童の習熟度に合わせた学習者用端末の活用が随所に見られた。端末を補助教材としてうまく活用し、双方向で授業が展開されていた。また、端末を使用した家庭学習も定着してきた。 ○教科担任制により、より深く興味深い授業が実践されていた。 ●全体的には学力向上が見られるが、勉強のできる子、できない子の差が大きく、中間層の幅が少なくなっている。	学習内容の理解については、9割を超える児童が肯定的な回答をした。保護者の肯定的回答率も4ポイント上昇した。ICT機器の活用については、CSの方々から、習熟度に合わせた活用や双方向の活用について肯定的な評価をいただいた。保護者の評価も約9割が肯定的な回答であった。今後も、効果的な活用方法を校内で共有し、楽しく、分かりやすい授業につなげていく。
	地域の教育力を生かした授業を行うとともに、「学習プロセス」を生かし、課題解決型の学習や交流学習に取り組む。	4	4	学習者用端末を用いて友達と意見交流を図るなど、対話的な学びの形が広がっている。教員と児童の数値にやや差があるので、今後も、個別最適な学習の実現に向け、指導を工夫していく。	4	4		第2回目のアンケートでは、課題解決的な学習などの主体的・対話的な学習についての設問に肯定的な回答をした教員は約9割であった。一方、めあてをもって学習にすすんで取り組んでいる、という設問に肯定的な回答をした児童は約8割であり、教員と児童との結果に差が見られた。今後も、個別最適な学びと協働的な学びによる指導の在り方を模索していく。
	高学年における教科担任制の導入による教科指導の充実を図るとともに、校内研究において児童の「書く力」の育成を通じて、「表現力」を高める指導の在り方を引き続き追究する。	4	3	高学年の教科担任制については、来年度、児童の質問項目にも加え、効果を検証する。「自分の思いや考えを書く」については、8割以上の児童が肯定的な回答をしている。今年度の校内研究では、「キーワードを使って書く」という共通テーマで、さらに書く力を高める取り組みを進め、児童が「書くことが楽しい」と思えるように指導していく。	4	3		校内研究を進めた結果、児童の表現力を伸ばすための工夫に取り組んだことに対する教員の肯定的な回答は約9割となった。また、児童アンケートにおいては、「日記や作文、振り返りやワークシートなどに、すすんで自分の思いや考えを書くようにしている」の項目の肯定的な回答は約8割であり、校内研究の取組の成果として、文章を書くことに対する抵抗感は減ったと考えられる。
健全育成（いじめ防止）	いじめ防止アンケートの活用や児童の実態把握を日々行い、いじめ対策委員会を中心に組織的にいじめ防止の取組を推進する。また、「特別の教科　道徳」をはじめ、教育活動全体を通じて思いやりの心の育成に取り組む。	4	4	「困ったことがあったら相談できる人がいる」という設問に肯定的な回答をした児童は、昨年度に比べて5ポイント多くなっている。今後も、ふれあい月間の取り組み等で、児童のSOSのサインを見逃さないようにしていく。一方、「学校は、子どもたちにとって相談しやすい場になっている」と感じている保護者は、児童と比べて少ない。今後も、学校だよりや保護者会等を通して学校の取組を伝えていく。	4	4	○ふれあい月間などの機会を逃さず、いじめの早期発見、丁寧な対応など、学校全体で正面から向き合い、早期解決に向けた対応がなされている。 ○六中生徒と一緒にあいさつ運動が再開できてよかった。今後も定期的に開催し、思いやる心や人としての成長につなげていけるとよい。 ●寝る時間が低学年から遅くなってきている。視力低下や眼鏡使用の児童も多くなっていて心配。	「困ったことがあったら相談できる人がいる。」と考えている児童の割合と、「学校は、子どもたちにとって相談しやすい場になっている。」と考えている保護者の割合との間に、13ポイントの差が見られた。今後も、児童の悩みに寄り添い、適切な指導にあたることができるよう、家庭との連携を密にしたり、情報を公開したりするなどして、より開かれた学校を目指していく。
	あいさつ運動を定期的に行うとともに、七小スタンダードを基に、授業等の規律の定着に取り組む。また、行事等で積極的にチャレンジする機運を醸成する。	4	4	約9割の児童が「先生や友達にすすんであいさつをしている」という設問に肯定的な回答をしており、「七小スタンダード」については、肯定的な回答をした児童が昨年度に比べて6ポイント増えている。あいさつや、きまりを守って生活しようとする態度が身に付いてきている。今後も、学校での基本的な生活を身に付けるよう、指導を続けていく。	4	4		「先生や友達に自分からあいさつしている」「七小スタンダードなどのきまりに気を付けて生活している。」という設問に肯定的な回答をした児童の割合は、1回目と比べ、どちらもやや減少している。今後も挨拶や規範意識について、全教職員で継続的に指導していく。チャレンジすることについては、今後も、日常の学校生活の様々な場面ですすんで取り組む気持ちを育てていく。
体力向上	休み時間の外遊びを励行する。また、なわとびチャレンジ等の取組を通して、運動の日常化を図る。	4	3	他の設問に比べて、児童の肯定的な回答が約7割と低くなっている。6月末から7月にかけて気温の高い日が続き、熱中症アラート発令により外遊びができない日が多くあり、その影響もあると考えられる。2学期には運動会も予定されているので、外遊びを励行し、児童の体力向上に努めていく。	4	4	○縄跳びや持久走、運動会など、コロナ禍前の活動が復活し、体を動かす喜びを友達同士で感じられたことがよかった。特に運動会で高学年の姿を見ることは、運動の動機付けにつながる。 ●運動会で、他学年や自分が参加しない種目への関心があまり見られなかった。今後は、他者への積極的関心の形成や意欲の向上が望まれる。 ●年間を通してみるとコロナの状況は変化していない。登校前の検温が大切。	「休み時間には、すすんで運動や外遊びをしている。」という設問に肯定的な回答をした児童の割合は、5ポイント増加した。「子どもが外遊びや運動を通して、体力を付けてきている」という設問に肯定的な回答をした保護者の割合も増えている。今後も、休み時間に限らず、運動会、持久走記録会、なわとびチャレンジなどの機会を体力向上に向けた取組と捉え、指導を行っていく。
	養護教諭、栄養士、地域、企業、関係機関等と連携した健康教育・食育を充実させ、健康の保持増進について指導する。	4	3	保健の授業や保健だより、栄養士による食育の授業や昼の給食に関する校内放送などを通じ、児童は、健康や食事に関する関心や意識を高めている。健康の保持増進に関わる設問の肯定的回答率は、児童と比べて保護者の方がやや低い。引き続き、学校と家庭とが連携して、児童が規則正しい生活を送ることができるよう協力していく。	4	4		「寝る時間や食事の仕方に気を付けている」という設問に肯定的な回答をした児童の割合も、「子どもが寝る時間や食事の仕方に気を付けている」という設問に肯定的な回答をした保護者も、約8割であった。今後も、保健指導や食育指導を継続的に行い、外部との連携も進めていく。また、家庭とも協力して、児童の基本的な生活習慣や食に関する意識を一層高めていくようにする。
特別支援教育	隔月でミニ研修を行い、学習環境の整備や特別支援教育の指導方法・内容への理解を深める。また、校内委員会で、コーディネーターを中心に校内における支援や指導方針を検討し、学校として統一した対応をするための、情報共有を行う。	4	3	特別支援教室「はなみずき」と連携し、児童の実態に合った指導を行うことについて、全ての教員が肯定的な回答をしている。一方、保護者の「学校は一人一人の状況に応じた指導をしている」という設問に対する肯定的回答は約8割となっており、個人面談等で具体的に伝える機会を工夫していく必要がある。	4	3	○運動会の副籍交流では、他の児童と同じように、運動会の一員となれるように配慮されていた。 ○支援教室の授業では、児童を受け入れようとする態度、児童の集中力を途切れさせない工夫が見られた。児童も、先生との受け答えに上手に対応し、集中して学習ができていた。	はなみずき学級と通常学級との連携についての設問に肯定的な回答をした教員の割合と、保護者アンケートの「学校は、一人一人の状況に応じた指導をしている」の設問の肯定的な回答率との間に、20ポイント以上の差が見られた。今後も特別支援教室の教員と連携し、特別支援の視点を生かした指導を工夫したり、全ての児童にとって学びやすい環境を整えたりしていく。また、そのような取組を学校だよりや保護者会等で伝えていく。
	各関係幼・保、中学校と連携し、適切な就学及び小・中学校9年間を見通した教育を行う。	4	3	保護者の「学校は、地域の幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行っている」の設問に対する肯定的な回答は8割弱であった。小中連携において、六中学区全体で児童・生徒の「書く力」の向上を図っていること、幼稚園・保育園と小学校、第6学年と中学校との引き継ぎ等の取組について、学校便り等で発信していく必要がある。	4	3		小・中連携では学力向上に重点を置き、児童・生徒の「書く力」の育成を目指した。各教科で「振り返り」を行い、書く量や質が高まりが見られるので、今後も継続して取り組む。「学校は、地域の幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行っている」という設問への保護者の肯定的な回答は約8割であった。今後も、保・幼・中との連携について、CS委員や保護者に発信していく。
地域連携	七小支援ネット、放課後子ども教室、CS、地域人材や関係機関などと連携し、よりよい教育活動を展開する。	4	4	「学校は、地域の教育力を生かし、学校支援ボランティアなど人材活用を進めている。」という設問に対する保護者の肯定的な回答は約9割であり、学校と地域が連携して教育活動にあたっていることが理解されている。引き続き、七小支援ネット、放課後子ども教室、CS、地域人材や関係機関と連携し、よりよい教育活動を展開していく。	4	4	○運動会等の行事において、地域の方々の参加も多く、連携がとれていた。 ○放課後子ども教室での吹奏楽の再開など、児童にとってよりよい環境が展開されている。 ●災害時の避難所運営について、学校側も、PTAや青少対、近隣自治体と連携を図りながら、避難所運営マニュアルの周知や熟知など、一緒になって検討し、その重要性を伝えていける存在になるとよい。	ゲストティーチャー、七小支援ネットや保護者と連携した学習を進めた結果、「ゲストティーチャーやおうちの人、地域の方といっしょに取り組む活動はよく分かり、楽しい。」という設問に肯定的な回答をした児童の割合は約9割となり、昨年度と比べて大きく増加した。また、七小支援ネットによる校外学習での引率や校内環境の整備などでも、協働して取り組むことができた。
業務改善・働き方改革	欠席等連絡のデジタル化や会議の精選、学校行事の取り組み方の工夫により学年会を充実させ、児童と向き合う時間を確保する。	4	4	欠席等連絡のデジタル化や会議の精選、学校行事の取り組み方の工夫等、今年度から行っている業務改善により、学校として業務の軽減を図ることができたと感じている教員が、昨年度より13ポイント増加している。業務改善や働き方改革の意識については、個人でも約9割の教員が肯定的な回答をしており、今後も更なる業務改善に努めていく。	4	4		行事や校務の内容の検討、会議の精選や削減、欠席連絡のデジタル化などのICT機器の活用等を通して、学校としての働き方改革は進んでおり、9割を超える教員が実感することができた。一方、個人として働き方改革を進めているか、という設問については肯定的な回答が8割程度となっている。今後も、学校の取組が個人の働き方に反映されるよう、業務の在り方を検討していく。